

## 鉄路の軌跡

豆鉄砲戦艦

北海道のとある町に古びた線路と廃駅舎があった。その駅に一人花を添え、手を合わせる老人がいた。この町はもともと炭鉱町で栄えており、大きな機関車の基地があり、駅には貨車がひっきりなしに往来し、何十両もの貨車をつなげた蒸気機関車が走っていたそうである。

時は溯り昭和一六年、日本の炭鉱業が最盛期だったころの話である。機関士になりたての霧島千歳は今日も先輩機関士に怒鳴られながらも、せっせと石炭を火室にくべていた。

この町には大きな炭鉱があり、駅には石炭山積みの貨車が何十両もひしめきあっており、今日もその貨車を港にある操車場まで運んでいたのだ。

先輩機関士には怒られてばかりだったが、地元の人や駅長さん、車掌さんはとてもかわいがってくれた。特に駅長さんには先輩機関士に怒られて落ち込んでいるときによくごちそうしてくれた。

しかし、時代が進むと、整備に手がかかり効率の悪い蒸気機

関車は活躍の場所を次々とディーゼル機関車にとって代わられた。そして、蒸気機関車と運命を共にするかのようになり、先輩機関士の定年退職の時期が来た。最後の乗務の途中にふと一言漏らした。

「立派な機関士になったな。もう何もいうこともない」と。千歳にとっては初めて褒められたので恥ずかしいような、むず痒いような複雑な気持ちだった。

駅に到着すると、大勢の機関士仲間が待っていた。そのうちの一人が大きな花束を持っていた。きつと、先輩機関士に渡すものだろう。駅に到着して駅のホームに降りると、大勢の機関士仲間がよってきて祝いの言葉を寄せた。

すると先輩機関士が寄ってきて、手袋を外すと「お前にこれやる。大切に使い」と渡してくれた。ホームから立ち去ろうとする後ろ姿に大きな声で「いままで、ありがとうございまして」と敬礼をすると、右手を挙げながら歩き去って行った。

泣いているのだろうか、笑っているのだろうか、自分が少し成長したような気がした。そのうち自分も新人機関士を指導するといった自分が新人機関士のときのことを思い出してつい微笑んだりしていた。

しかし、最近心配することがあった。最近心なしか貨物の量が減ってきているのだ。同じ北海道の他の路線でも廃線が決まっているところがあるので、それを心配しているのだ。実際に

他の基地の機関士は乗務していた路線が廃線になったため、転勤になった人もいるのだ。日本全体の鉱業の斜陽化が進んでいるうえ、町でも噂になっているのだ。

時代が進み機関区の縮小が決まった。千歳は何とか基地に残ることができたが、多くの機関士が他の基地に移ったり、駅員になったり車掌になったりした。

そんな中大変なことが起こった。炭鉱で大規模な粉塵爆発が起こったのである。死傷者が多数出たので、一時期は廃止のうわさがあちらこちらでささやかれていたが、鉱山の所長の賢明な努力によって廃止は回避できた。しかし、もう誰もが、鉱業の衰退を予想していた。

……そう言えば、この前駅長さんが言っていた。

「昔は、この線もたくさんのお客さんが乗っていて、たくさん貨車が走っていたのに……。これじゃあ、自分の定年が先か、この線自体の廃止が先かわからなくなってきたよ。さびしいもんだ。」

ある日のこと、機関区の助役から広域異動について聞かれた。この内容は余剰人員の多い北海道や九州、四国から、人員の不足りしている、東京や関西、東海に転属するか？という内容だ。千歳は年老いた両親がいるため、異動を断った。

それからしばらくすると、鉄道学園時代の同期から電話がか

かってきた。当時から気の合った友人で、違う職場に配属されてからも、あったりする仲であった人間である。広域異動で北海道から関西の新大阪駅に移ったが、言葉がわからずに苦勞しているらしい。

そういうのを聞いていると『自分もこうなるのか』と心配を隠せない千歳であった。

どんどんと回りの状況が悪くなっていく中、二回目の大事故が起こった。駅を出発して山を登って行った貨物列車から貨車の連結器が外れて、貨車が逆走したのである。その事故の影響で死傷者が多数発生した。

このことは新聞でも大きく取り上げられ、問題となった。会社の上層部ではこの事故を期に、路線を廃止しようという考えが上がったらしいが、北海道出身の人が懸命に廃止を撤回しようとなつたらしい。このことが基地に伝わってくると、『やっぱりこの路線を愛してくれている人がいるんだ』としみじみ感じる千歳だった。

この時間が長く続くと誰もが願っていたに違いない。しかし、現実はそのままで甘くなく、最後の時間が迫っていた。

ある日のこと、毎日基地に張り出されている広報の周りを、多数の職員が囲んでいた。聞いてみると、この路線の廃止が決まったそうだ。来年の春が最後の運転となりそれ以降は走らないうさうだ。

駅や基地にたくさんの方が問い詰めてきた。「町の住人の足を奪うつもりか」と、職員は悔しがりながらも「僕たちにはどうしようもなかったんです。」と悔しがっていた。その日から休日を中心に遠くからの客で車両が満杯になっていた。

千歳は悔しかった。廃止になってからこれほど多くの客が乗ってくるのかと、普段からこれほど乗っていれば、廃止にはならなかったのかもしれない。

廃止当日、最終列車の運転士は千歳が選ばれた。基地を出発するときには職員総出で、盛大なセレモニーが行われた。出発の汽笛を盛大に鳴らし、基地に残っている機関車の汽笛と職員の拍手によって見送られた。駅では出発式が執り行われた。千歳は運転しながらいままでのことを思い出しながら、泣いていた。

時代は現代に戻る。

人は言う、あの老人は昔ここを走っていた路線に対して、花を捧げているのかも知れない……。

他人は言う、今も駅舎からは人の声や汽笛、線路からは機関車が走る音が聞こえてくると。